東京外国語大学論集第 98 号 (2019)
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES, AREA AND CULTURE STUDIES 98(2019)

物申す「社会的弱者」たち
—アッタール著『神の書』から中世イラン社会を見つめる—[1)]

'The socially vulnerable' in *Ilāhī-nāmah*-yi 'Aṭṭār-i Nīshābūrī

佐々木あや乃
SASAKI Ayano

大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies

はじめに
1. 絶対権力者に対して
　1.1 老翁、貧者
　1.2 職人
　1.3 ペテン師
2. 社会的地位・身分の高い者に対して
　2.1 若者
　2.2 貧者
　2.3 博打打ち
　2.4 ごろつき
　2.5 女性
　2.6 女男
　2.7 異教徒
　2.8 動物
　2.9 物
3. 庶民に対して
　3.1 女性
　3.2 子供
　3.3 放蕩者
　3.4 鳥

本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

4. 鳥や動物に対して
4.1 蟻
4.2 家禽
5. 物に対して
5.1 土塊
5.2 焼片（ほくち）
おわりに

キーワード：アッタール、神の書、社会的弱者
Key Word: ‘Aṭṭār, *Ilāhī-nāmah*, The socially vulnerable

要旨

12 世紀のペルシア神秘主義詩人アッタールの『神の書（*Ilāhī-nāmah*）』では、当時の社会の様々な人物像が真実の求道者、あるいは「完全人間（Insān-i kāmil）」の象徴として登場している。筆者はアッタールの大著『神の書』の翻訳という作業に携わる中で、詩人が社会の下位に位置付けられる人々―媼、女性、女男、物乞い、犯罪者、放蕩者、非ムスリム―、さらにはイスラームで忌み嫌われる犬をはじめとする動物、土塊や焼片等、なんら価値を見いだせないような物に対してまで温かな眼差しを向け、自らの人間的かつ神智的な目的を明示するために彼らを登場させていることに強い関心を抱いた。アッタールは、上述の人物像、弱い動物や通常見落としてしまいがちな物と、社会的影響力のある人物、強い動物、価値ある物とを対峙させ、実社会に反して前者の価値を押し上げて我々に提示しているのである。

本論考では、『神の書』の中から具体例を挙げつつ、特にアッタールの時代の社会階層に注目し、こうしたいわゆる「社会的弱者」に対するアッタールの優しく温かな眼差しを浮き彫りにしてみたい。

In ‘Aṭṭār’s mathnavī works, especially in *Ilāhī-nāmah (The Book of God)*, various social characters are seen as symbols for seekers of the truth, and sometimes even in the form of Insān-i kāmil (a Perfect Man). Regarding to the story space and stories, they bear specific responsibility to advance the goals of ‘Aṭṭār’s metanarratives. The author has taken note of this point well during these several years while she had been translating *Ilāhī-nāmah* into Japanese that the poet has an affectionate look at the wicked or lowly persons, weak ones, even negative characters in his age like old women, female servants, sodomies, beggars, criminals and accused, religious minorities, impure animals and even objects of no

material value like clay and burnt off, and he uses them to explain his human and mystical intentions. ‘Aṭṭār put these kinds of characters and animals who are relatively weak, or insignificant things in front of the important characters of the community or strong animals or valuable items in order to show us their higher value unlike the real, outside world.

This article tries to prove that the above-mentioned ‘Aṭṭār's view of compromise and tolerance will be explained clearly with reference to the evidences of phrases in the poetry, especially with attention to classification of society in his age, in order to take even a small step in the way of recognizing this prominent poet.

はじめに

アッタール（‘Aṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad, 1145?-1221/29/30）の詩は、詩人自身の内なる問題—精神性や神智学—の帳を外すのみならず、当時の社会の特徴を我々の眼前に繰り広げ得るという点において、分析する価値が十二分にある。アッタールという詩人は、逸話の中で対話を効果的に用いること—例えば、相手に質問する、苦言を呈する、相手の言動を批判する等—によって、読者が逸話を楽しく読み進めるばかりでなく、詩人自身がその言葉に含めた意図を読者が容易に理解できるよう工夫を凝らしている。逸話が展開する舞台やその空間は、時として尋常ならぬ様相を呈するにもかかわらず、読者がそれに驚愕・当惑せずに済むのは、アッタールの言語芸術に拠るところが大きいといえよう。実社会では決して物が支配者に物申すことなど起こりえないし、イランでは女男[2]がムスリムに意見することもない。唯一「理性ある狂者（‘Uqalā-yi majānīn）」のみが、社会のありとあらゆる階層に影響を与える可能性を秘めている。また一方で、預言者や聖者はこの世の全存在と通じ合うことができる。[3]

アッタール自らが医業に携わっていたため、当時のありとあらゆる社会階層と接する機会を持ち、それゆえに様々な人物像、そして動物、物質をも作品に用いるに至ったことは想像に難くない。社会的地位やさしたる身分をもたない人々、不浄とされる動物や価値のない物に注がれるアッタールの視線は非常に優しい。独特な手法によってかれらを説話の中に登場させたのは、アッタール自身の人間観に依るところが大きいと考えられる。[4]当時が男性優位社会であったことを考慮すれば、女性に注がれるアッタールの視線はかなり特殊であり、『神の書』冒頭の名高い逸話「高潔な女の物語」と終盤の「カアブの娘」はこうした逸話の代表的な例といえるのである。[5]

ここでは、いわゆる「社会的弱者」が、１．王や大臣といった政治的権力者に対して、２．聖者や導師といった社会的地位の高い者に対して、３．庶民に対して、４．鳥や動物に対して、５．物に対して、いかなる苦言を呈し、批判を浴びせているのか、例を挙げつつ見ていくこと

にしたい。アッタールの「社会的弱者」への視線を探る試みであると同時に、当時の社会を知る一端にもなりえるだろう。

1. 政治的権力者に対して

アッタールの『神の書』では、社会で権力を有する政治家たちが、精神的には崇高であるものの社会的地位には欠ける人々の放った言葉の影響下に置かれる。彼らは自らの行動や言葉の持つ力によって、相手を厳しく戒め後悔の淵へと導くのである。

最初に断っておきたいのだが、アッタールの描く社会的弱者の中で、多くの研究者の関心を集めた「理性ある狂者」は間違いなく社会的弱者の範疇に含まれるものの、既に多くの優れた研究が発表されているため、本論考の研究対象からは敢えて除外する。また、媼は往々にしてスルタン・マフムードに対して不遜な態度に出て一際目を引く役割を担わされていたり、ある大臣をも諌めたりもしているが、上述の「理性ある狂者」との線引きを明確にすることが難しい側面もあるため、本論考の研究対象からは除くこととした。したがって今回本章で取り上げるのは、政治権力者たちに教訓を与える老翁や貧者、そして通常殆ど注目されることのない、卑しいとされる職業の従事者や罪人が登場する物語からの例である。

1.1. 老翁、貧者

老翁や貧者は、ガズナ朝（977-1187）で最も権勢を誇ったスルタン・マフムードに、なんら躊躇することなく、礼儀作法もわきまえずに含蓄ある言葉を放つ。

「スルタン・マフムードと同じ名前の男の話」(15 章 4 話)では、スルタンは腰の曲がった、裸足で埃まみれの老翁に出会う。スルタンが老翁に名前を尋ねると老翁は「私は貴方様と同じ名前のマフムード」と答える。スルタンは「余とお前が全く同じ‘マフムード’であるはずがない」と言うと、それに老翁は次のように答える。

> おお、王様。私たち 2 人が人生という旅を終えると、まずここより 2 ギャズ[6]地下に埋葬されます。そうすれば、2 人のマフムードは平等になります。今平等でないのは私が取るに足らない男だからです。死んだら私は貴方様と同じになるのです。[7]

老翁のこの言葉は、世界中のいかなる権力者の心にも突き刺さる言葉であろう。

「マフムードと道で出会った物乞いの話」(15 章 9 話)では、物乞いがスルタンと軍に道で出くわすが、スルタンが挨拶したにもかかわらず、物乞いはろくな挨拶もせずに去ろうとする。そこでスルタンは驚いて軍に「あの物乞いの誇り高いさまを見よ」と言う。その物乞いの返答

が次の通りである。

もし貴方が賢いなら、貴方こそ物乞いであるというに、なぜ私を物乞いなどと呼ぶのですか？私は百以上の町や村をまわってどこのモスクにも貴方が物乞いであるしるしを見たのですよ。どの家にも麦一粒分、いや麦半粒分、貴方は物乞いと書いてあったのです。貴方の圧政に対して声を上げていないバーザールや店を私は見ませんでした。今、もし貴方が慧眼なら、私たち２人のうちどちらが物乞いなのかよくご覧なさい。[8)]

物乞いの言葉は、支配者という立場にある者は、臣民に税や貢ぎ物を求めることを当然と考えていることを意図している。この答えは傾聴に値する、熟考すべき言葉といえる。

以上の２例より、アッタールは、スルタンであろうと物乞いであろうと、人間としての価値に優劣などなく、地位や名誉、富の有無は、人間の真価とは何ら結びつかないという確固たる信念の持ち主であることが窺われる。

1.2. 職人

「職業に貴賤はない」ということは周知の事実であり、いかなる職業も敬意を払うに値することは言を俟たない。しかし、アッタールの時代では、おそらく洗濯屋や煉瓦職人は決して社会の上位に位置づけられなかったであろうし、人々は彼らをさして重要視してはいなかったと考えられる。こうした人々が、アッタール作品の中ではスルタン・マフムードに毅然とした態度で物申し、この世に起こるさまざまな出来事について、なんら怖れも恥じらいも礼節すらももたずに堂々と理にかなった自説を語る。

1.2.1. 洗濯屋と日干し煉瓦職人

「スルタン・マフムードと洗濯屋と日干し煉瓦職人」（15 章 5 話）では、スルタン・マフムードは洗濯屋にすべての布地の値段を問う。洗濯屋は「10 メートルもあれば死装束（経帷子）には十分なのに、なぜ布地すべての値を尋ねるのか」と諌める。別の場所で煉瓦職人を見かけたマフムードは、煉瓦職人にすべての煉瓦の値段を問う。すると、煉瓦職人は「貴方様のお墓には 10 個の煉瓦で十分」と言い、さらに次のように続ける。

この２つのものを貴方様はこの世から持っていくことができるのです。これ以上のものは顕示欲にすぎません。もし貴方様がご自身の努力で何か利益を得たのなら、この世はまるで大きな不幸に見舞われたかのようです。貴方様の不吉な欲を捨て、叡智で心の安らぎを得な

さい。王国に別れを告げ、自身のすべきことにとりかかりなさい。貴方様はほんの一瞬しか王国を手にできないのですから、余計なことはなさいますな。もう時間がありませんぞ。[9)]

王は 2 人のこの言葉を聞き、感情を抑えきれず、大泣きに泣き、気を失ってしまう。結局、王は 2 人に多くの黄金を与え、町に戻ってこの話を語るのだった。

1.2.2. 塩売り

「アヤーズに恋した塩売りの若者の話」(14 章 24 話) では、アッタールが物語の途中から「物乞い」と称するほど貧しい塩売りの若者が、マフムードの寵愛を受ける美しい小姓アヤーズに恋をする。自分のアヤーズへの恋心をマフムードに告げ、アヤーズをどちらがより愛していて、どちらが本物の愛なのかと詰め寄る。一読する価値のある、王と若者の問答が畳みかけられているのだが、紙幅の関係上問答すべてを引用することができないのが至極残念である。王は、「アヤーズから手を引かなければ命はない」と若者を脅したり、彼の貧しさを嘲ったりする。そして問答も佳境に入った頃、我がアヤーズのどこに恋したのかと王が問うと、貧しい若者は「アヤーズの身体のどこか一部に恋するなどできはしない」と答えてから、さらに次のように続ける。

私の魂は激情の嵐。貴方様もご存じの通り、それはアヤーズの真珠の耳輪のせいです。私は彼の耳輪を見ると、それを我が魂で買いたいと思うのです。その耳輪の評判は私をこれほどまでにかき立て、まるで酔っ払いのように私を狂わせるのです。[10)]

耳輪は奴隷の証である。王の「その真珠を見つけた者は、真珠を肉体という海から得たのか、それとも魂という海からか？」という問いに対し、若者は「この真珠は我々の愛という海から生まれた」と言い、その海に潜らんとする王に次のように答える。

陛下はこの海に上手に潜ることなどできはしません。なぜなら純粋な者ただ 1 人しか潜ることはできないのです。その唯一の人とは、両世界を捨ててこの海に頭から潜った者。息を止め命を惜しまず、海底深く真珠を求める者。貴方様は全世界に翼を広げている存在。どうあがいてもあの真珠を得ることなどできはしないのです。[11)]

マフムードは、アヤーズの耳輪の真珠は自分のものであり、それを何の苦労もせずに手にいれたものと主張するが、物乞いは見事なまでにきっぱりと次のように答える。

よくお考えなさいませ。いつ陛下は真珠を手に入れたのですか？この真珠は陛下の耳に下がっていた時は、陛下の持ち物でした。気高き王よ、今真珠は陛下の耳に下がってはいないというのに、陛下が真珠に何の関係があるというのですか？もう何もお話になることはないはずです。もし陛下が世界を支配する王として愛に忠実だったならば、耳輪は奴隷の耳にではなく、陛下の耳に下がっていたはずです。愛しい者が耳輪をつけて恋人に従順な証を示しているというのに、恋する者が遠い遠いカペラ星まで苦労して上るなど、ありえないではないですか？もし陛下が恋しているのなら、無駄な努力はおやめなさい。耳輪は陛下の耳についているべきもの。陛下にはアヤーズの下僕たる証の耳輪がついていないのですから、恋しているなどと主張するのはおやめなさい。[12)]

スルタン・マフムードはこれを聞いて恥じ入り、王座を下りて私室に入ってしまったという。

1.2.3. 農夫

農夫は、当時の社会において前項までの人々ほど蔑まれてはいないと考えられはするが、それでも社会的強者とは言い難い。「公正なヌーシールヴァーン王と年老いた農夫の話」（2 章 5 話）では、その公正さで名高い王が、植樹に熱心な 1 人の農夫になぜ木を植えるのかと問う。将来のため今を大切にして自らの力で木を植えるという年老いた農夫の深慮に王はたいへん感じ入り、多大な褒美をとらせる。

1.3. ペテン師

アッタールは社会の底辺にも目を向け、罪人や放蕩者が恐怖や疑念を抱くことなく、不正をおこなう政治家や支配者に自らの本心を伝える機会を与えている。「スルタン・マフムードとペテン師の男の話」（18 章 9 話）では、「お前は王にいかさまを教える気か？」と尋ねるスルタン・マフムードに、ペテン師の男が次のように答える。

この世の支配者よ、立ち去るがよい。何をなさりたいのですか？蝶と蝋燭が決して友とならないように、いかさまと、王権のしるしである大太鼓や旗が、共にあることなどないのです。あらゆるものから自らを解放し、一人で真実を求めるために歩みなさい。もし一人で歩むことができないなら、ご自身のことに専念し、自分のことだけをお考えなさい。[13)]

2. 社会的地位・身分の高い者に対して

アッタールは、通常、社会で尊敬の対象と目される預言者、聖者、スーフィー、支配者を、大衆と、さらには非力な人々や動物と対話させることによって、神智学を世の中に知らしめる手立てとしている。

2.1. 若者

「バルフのシャキークが神を信じることについて語った話」（9 章 5 話）では、シャキーク・バルヒーというマドラサの導師が、ある若者の問いに答えられずに降参してしまう。物語冒頭では、導師が説教講話の場で「神に頼ること」について説いている。師が「私は旅に出る際、神を信頼しているので、身につけた 1 枚の銀貨にすら手もつけなかった」と語ると、若者が次のように師に問いかける。

> 袋に 1 枚の銀貨を入れたというのに、いったいどうしてあなたの魂は神を信じたと言えるのですか？その銀貨が百もの妄想にあなたを突き落とした時、どこであなたは神を信じたと言うのですか？神を強く信じていたのなら、その 1 枚の銀貨すら要らなかったのではないですか？[14)]

誰もが膝を打つ、若者の見事な問いかけと主張である。

2.2. 貧者

「貧者へのイブラーヒーム・アドハムの問い」（3 章 1 話）では、当時の名高い聖者の 1 人、イブラーヒーム・アドハムが、ある貧者に次のように問いかける。

> 「妻や子供と過ごしたことはあるかい？」
> 貧者が「いや」と言うと、イブラーヒーム・アドハムは「実にすばらしい！」と答えました。
> 貧者が彼に言いました。
> 「おお、聖者の中の聖者よ、なぜそのように言うのか？教えてください。」
> するとイブラーヒームは言いました。
> 「おお、男よ、妻を娶った不幸な貧しい男は誰も、食物も眠りもなく船に乗っているようなもの。そしてもし子供がいれば、船ごと溺れるようなものだからさ。」[15)]

アッタールはこの物語の中で、貧者が妻子を持たぬ単なる独り身ゆえイブラーヒームよりも

恵まれている、と述べたかったわけではない。この貧者が妻子への愛着を持つ必要もなく、完全に自由に生きているという点に着目したからこそ、貧者を１人の「完全人間」と見做したのである。

2.3. 博打打ち

「導師(シャイフ)アブー・サイードと博打打ちの話」（18 章 10 話）では、アブー・サイードがやくざな放蕩者たちに担ぎ上げられている博打打ちの男を目にし、なぜ彼が王のように扱われているのかを本人に尋ねると、男は「素寒貧になったのだ」と答える。この答えを聞いた導師(シャイフ)は叫び声を上げ、次のように語る。

> 素寒貧になるというのは１つのしるしであることを知っているのか？真の王とは素寒貧であることなのだ。すべて失うことができる人は誰も真の王なのだ。なぜならごまかしは、突然訪れる不幸のように人生を台無しにするからだ。[16]

2.4. ごろつき

11 章 7 話「導師(シャイフ)バーヤズィード[17]と鞭打たれていたごろつきの話」では、バーヤズィード・バスターミーが、鞭打たれ血塗れであるにもかかわらず微笑みを浮かべたごろつきを見て、「なぜ笑っているのか。なぜこの痛みを耐えられるのか」と問いかける。

> 導師(シャイフ)さまよ、おいらの惚れてるあいつが遠くにいたんだよ。道端でおいらを見ていたのさ。ただじっとおいらをね。あいつが道端にいるのを見てよ、その時おいらは痛みなんか感じなかったぜ。もしあの時おいらが百回鞭打たれてたとしてもよ、それは一瞬よりもずっと短い時間にしか思えなかったのさ。おいらが惚れてるあいつがおいらのために立ちっぱなしでいるってぇのに、なんでおいらが耐えられないことがあるのかい？[18]

アッタールはこの物語を引用した理由を、次のように表現している。

> 信仰において従順な人々が神の最低の下僕から教えを得るというのは、よくあること。[19]

2.5. 女性

2.5.1. ズバイダ

ズバイダはハールーン・アッラーシード（アッバース朝（749-1258）第５代カリフ）の妻で

あるとはいえ、所詮1人の女性にすぎない。20章3話「ズバイダに恋したスーフィーの話」を読む際には、当時の社会ではカリフの妻といえどもスーフィーの方が格上であり、人々の尊敬を集める対象であるという前提を確認しておく必要があろう。

偶然ズバイダの美しさを目の当たりにしたスーフィーが、彼女に激しく惹かれ、叫び声を上げる。その声にうんざりしたズバイダが金の入った袋を従者からスーフィーに渡すと、スーフィーは押し黙る。それを見たズバイダは、スーフィーを追放するよう命じる。スーフィーが追放の理由を尋ねると、ズバイダは次のように答える。

おお、自らを愛する者よ、今後はお前は恋する者と呼ばれるに値しません。お前は私に恋したふりをしたのに、金を見たら私への愛はもう終わりとは。頭から足の先までお前が恋したふりをしているだけと私にはわかりました。お前の見かけも偽りとわかりました。私はお前を試し、お前は私の試験に落ちたのです。お前は強い意志を持って行動してはいないと私は確信しました。もし真に私を求めていたなら、私の所有物、財産、金も銀はすべてすっかりお前のものになったでしょう。でもお前は私を売ったので、私はお前の望みにふさわしい罰を与えることを決めたのです。お前は真に私を求めるべきだったのです。おお、愚かな何も知らぬ友よ、そうすればすべてがいちどきにお前のものとなったでしょうに。[20)]

2.5.2. ラービア

ここで我々が注目しようとする「ラービア」は、『神の書』の終章あたりに登場する名高い王女のラービアではなく、女性神秘家ラービアである。

「バスラのハサンとラービアの物語」（7章11話）では、ハサン・バスリーという偉大な聖者と対峙する形で女性聖者ラービアが登場する。アッタールはラービアを徳の高い女性聖者として描出している。この物語では、ハサンがラービアを訪ねると、彼女を取り巻いていた山羊や鹿などの動物たちが、一斉に彼を怖れて逃げてしまう。ラービアがハサンに何を食したかと尋ねると、ハサンはここに来る前に玉ねぎを脂（あぶら）で炒めて食べたという。これを聞いたラービアは、きっぱり堂々と次のように答える。

あなたはこの哀れな動物たちの脂を食したのですから、あなたから彼らが逃げないわけがありませんわ。[21)]

アッタールはこの物語を語り終えた後、自らの下した結論を我々読者に次のように示す。

もしあなたが蟻のようにわずかしか食さないなら、あなたの墓に群がる蛆虫たちはごくわずかの食いぶちにしかあずかれない。もしあなたが一粒のなつめやしで日々力を得るなら、棺の蛆虫に襲われずに無事にいられるだろう。蛆虫(ケルマーン)たちはあなたの身体のあちこちにとりつくので、ケルマーン産のなつめやし[22]一粒で満足するはず。[23]

アッタールの考えでは、人間は自らの食欲を制御すべきであり、制御すれば、自らの魂を自浄し、自らの身体を作り上げ、自らの精神を慈しむことができるようになるのである。医業を生業としていたアッタールらしい主張である。

2.5.3. 侍女

アッタールは、預言者ムハンマドの教友の 1 人としてバドルの戦いをはじめとする多くの戦いで預言者の許で戦った、アブドゥッラー・ビン・マスウードという人物を、「マスウードの息子アブドゥッラーとその侍女の話」(終章 13 話) で逸話に登場させ、侍女と対峙させている。アブドゥッラー・ビン・マスウードが金銭のために侍女を売ろうとすると、侍女はとても悲しがり激しく泣き出す。アブドゥッラーが彼女に泣いている理由を尋ねると侍女は次のように答える。

なぜ私は結局は私をお金欲しさで売ってしまうようなお方にお仕えしてきたのでしょう？なぜ私は老いてお金のために処分されてしまう場所で青春を過ごしてしまったのでしょう？なぜ私は私の奉仕が売られてしまう場所で人生を過ごしたのでしょうか？なぜ神の宮居が私の前にあるとき別人の宮居へと顔を向けてしまったのでしょうか？そのような宮居が自分の前にある時、どうして人は別の宮居へと歩むことがありましょうか？ご主人様、私の言葉に耳を傾けないでくださいまし。たとえもう今の私に何の価値もなかろうとも、私をお売りください。[24]

たいへん興味深いことに、アッタールはこの侍女の言葉の直後、侍女のこの言葉を聞きつけた大天使ジャブラーイール (ガブリエル) に「この娘こそ自由を享受すべき人間」と神に進言させている。

2.6. 女男

女男は、アッタールの時代のみならず現代においても、イラン社会では十分な権利を享受できているとはおそらく言い難い。『神の書』には、女男が登場する逸話が 2 つ含まれている。

しかし、アッタールは当時の社会で主流だった考えに相反し、女男に対して温かな視線を送っている。女男の行動から導き出すアッタールの結論は、現代においてすら頗る論理的で多くの人の賛同が得られるものといえるであろう。

「ビザンツで捕らえられたアリー[24]の末裔と学者と女男の話」（2 章 2 話）は、まるで落語のような話である。アリーの末裔、学者、女男がビザンツで異教徒に捕らえられてしまう。異教徒たちはこの 3 人に「偶像に跪拝するか、さもなければ殺されるか」の選択を迫る。

アリーの末裔が口を開きました。

「やむをえまい。偶像の前で異教徒帯（ズンナール）を締めよう。私にはアリーの絶対的権威がある。アリーが明日よしなにとりなしてくれるだろう。」

学者はこう言いました。

「私も肉体と魂に別れを告げることなどできぬ。もし偶像にひれ伏すなら、学問と信仰にしたがって、とりなしてくれる人を見つけなければ。」[26]

しかし、女男の意見は異なる。

女男は言いました。

「あたしはどうしたらいいかわかんない。だってあたしにはとりなしてくれる人もいないもの。あなたたちにはとりなしてくれる人がいるけど、あたしにはいないのよ。でも、この跪拝はあたしにとって許されることじゃないわ。もし奴らが、蝋燭みたいにあたしの首を落としてもこわがるもんですか。あたしは偶像崇拝できないわ。だってそれは破滅なのよ。偶像に跪拝するなんてできない。たとえ首を切り落とされようとも。あたしこわくなんかないもの。」[27]

女男の行動が誰より最も「男らしい」ことは明白である。アッタールも逸話を語った後、次のように述べている。

試練の時に男らしさを讃えられるのが、女男だったとは実に驚きである。[27]

10 章 9 話「ブハラの聖者と女男の話」では、女男に出会ったブハラの導師が、女男に触れまじと自らの衣服の裾をたくし上げる。それを見た女男が導師に「あたしとあなたの真価は今はわからない。最後の審判の日に真価が明らかになる。それなのに、なぜ今あなたはあたしを避

けるの？」と問う。導師はこれを聞くや否や地面に倒れ、導師の心は苦痛に満ちる。アッタールは逸話を語った後、次のように述べる。

心よ、今日誰があなたの真の存在価値を知っていようか？あなたの心は自身の真価から外見上は離れ、落ち着いているように見えるにすぎないのだ。もしあなたがあなた自身の真価を求めるなら、あなたの驚きは瞬間ごとに増すだろう。神の命令に従って歩め。なぜならそれを選べるのだから。他には何もあなたはできないのだ。この世から、あなたは善であろうと悪であろうと連れ去られるのだ。あなたは自分の意志で来たわけではなく、自分の意志で去るわけでもないのだ。[29)]

2.7. 異教徒

イスラーム以外の他宗教信者は、アッタールの時代のイラン社会では明らかに少数派である。ペルシア神秘主義詩最高峰のルーミー(Rūmī/Mawlawī, Jalāl al-Dīn Muḥammad, 1207-73)の『精神的マスナヴィー(*Mathnawī-yi ma'nawī*)』でも、残念ながら異教徒とりわけユダヤ人は忌むべき存在、悪の権化のような描かれ方をしていることはよく知られている。

しかし、アッタールはユダヤ教徒やキリスト教徒に敬意を払った描き方をしている。「預言者ムハンマドの許にやって来たアビシニア人の話」（11 章 9 話）では、ユダヤ教徒かキリスト教徒であるアビシニア人が預言者ムハンマドの許を訪れ、懺悔を受け容れてもらえるよう頼む。アビシニア人は、預言者の「神にはどんな些細なことも隠しだてできない。お前の罪をごく僅かずつ神はご覧になったが、寛大さによってあからさまになさらずお許しになられた」という言葉を聞くや否や、深い溜息をつき息を引き取る。それを見た預言者は「友よ、みな急ぎ集まれ」と呼びかけてから次のように教友らに呼びかける。

神に対して大いに恥じたゆえに命を落とした者のため、涙を流し、神への祈りを捧げるよう呼びかけよ。[30)]

「イーサー（イエス）とユダヤ人たちの話」（14 章 18 話）では、ユダヤ人たちがイーサーに悪態をついたにもかかわらず、イーサーは明るい表情で彼らに祈りを捧げる。それを見た人がイーサーに「なぜ怒りもせずに彼らのために祈るのか」と問うと、イーサーは次のように答えるのである。

どの心にも魂が宿っていて、それは自身が有するものを与える。[31)]

2.8. 動物

動物は、自らの示す特別な行動によって、心に在る思いを聖者の耳に届ける。アッタールの『神の書』に登場する動物たちは、政治的権力者と直接言葉を交わして意志を疎通させることはない。唯一動物と話すことのできるスライマーン（ソロモン）が蟻と話す逸話が盛り込まれているように、預言者や聖者と動物は意思疎通が可能である。まず、その蟻の例から見ていくこととしよう。

2.8.1. 蟻

2 章 3 話「ダーヴード（ダビデ）の息子スライマーン（ソロモン）と恋する蟻の話」では、スライマーンが小山を崩すことに懸命で自分に挨拶もしない蟻を見て、なぜこれほどの速さで小山を崩せるのかと蟻に尋ねる。すると蟻は志あらば不可能はないと言い、さらに「私には姿の見えない一匹の雌蟻がいて、彼女は私に『もし、この土だらけの小山をここからなくして道をきれいにしてくれたら、あたし、あんたと一緒になるわ。』と言った」と説明し、さらに次のように続ける。

> 今私はこの小山を崩すことに専念しようと思います。この土を運ぶこと以外、なすべきことはありません。もしこの土がなくなれば、彼女と結ばれるのです。そしてもし私が道半ばで命果てても、少なくとも、何もしないで自慢だけしてほらを吹く奴ではないといえるでしょう。[32)]

アッタールはこの逸話を述べた後、次のように語る。

> 愛しい者よ、蟻から愛を学びなさい。こうした見識を盲目の人から学びなさい。蟻が不運な星の下に生まれついているとしても、蟻には何かをやり遂げようという心構えがある。蟻を卑しいものと見做してはならない。蟻の心にも情熱があるのだ。[33)]

続いての物語「信徒の長アリーと蟻の話」（3 章 4 話）では、蟻はアリーに語りかけはしないが、その身体が動かなくなったさまを見せることによって、アリーに忠告し、最終的にはアリーを許す。アッタールは預言者の口を借りて蟻の言葉をアリーに告げる。

> 喜べ、悲しむな。あの蟻がこう言ってそなたを神にとりなしてくれたのだ。「おお、神よ、獅子たるアリー（ハイダル）はわざと私を傷つけたのではありません。もしアリーにあの時敵意があった

としても、今はもう敵ではありません。」[34)]

2.8.2. 猫

3 章 2 話「導師(シャイフ)クッラカーニーと猫の話」では、猫が当時の精神的支柱と見做されていた導師(シャイフ)クッラカーニーに不平を表明する。導師(シャイフ)は一匹の猫を庵で飼っていた。その猫は大変行儀がよく、常に革製の靴下を履いた、しつけの行き届いた、決して他者の餌の盗み食いなどしない猫だった。しかし、ある日その猫がフライパンから肉を一切れ盗んだため、導師(シャイフ)の召使いが猫をひどく罰する。猫はその召使いの対応に怒り、主人である導師(シャイフ)とも絶交する。導師(シャイフ)は猫の怒りの理由を探り、猫にも尋ねる。猫は 3 匹の子猫を生んだので、導師(シャイフ)は猫が身ごもっていたことを知り、次のように心の中で呟く。

猫には間違いなく理由があった。自らの利益などまったく顧みずにいたのだから。猫がこんなことをしたのは、礼儀を捨てたからではなく、必要があったから求めたのだ。人はいざ必要となれば、たとえそれなりの地位にあっても、してはならぬことも許されるもの。子供のために一匹の蜘蛛にも劣るものが、獅子の口から食べ物をひったくったのだ。猫の行動はおかしなことではない。なぜなら子供への執着が不可思議なことだからだ。子猫が生まれるまでは、一匹の子猫への心配などお前の心に浮かびもしなかったはず。[35)]

この後、導師(シャイフ)は召使いに猫に謝罪するよう言うが、功を奏さない。ついに導師(シャイフ)が猫のところに行って話しかけ、仲裁に入り、枝から下りてくるよう呼びかける。すると、猫は一気に枝から下りてきて、導師(シャイフ)の足下で転がりまわったので、そこにいた人々皆、大いに喜ぶ。
アッタールはこの物語の結論として、次のように述べている。

もしあなたが百もの世界と結ばれていようとも、一人の子供との絆には勝るまい。子供に執着せず、生むことも生まれることもないのは、清らかで唯一の存在たる神のみ。[36)]

つまり、親子の絆はいかなる絆よりも強く、切っても切れないものであり、その絆を断つことは至難の業である、ということを我々に力説しているのである。

2.8.3. 犬

犬は、異なる社会や文化において様々な形で人間と対峙し、常に人間の関心を集めてきた動物である。古代より総じて人間の手助けをしたり、人間の安全を守ったりしながら、人間と共

に暮らしてきた。しかし、イスラームの教えを説く文学作品においては、残念ながら犬は「不浄の動物」と見做されているため、ルーミーをはじめペルシア神秘主義文学においても非難さるべき対象として位置づけられていることが多い。

しかしながら、アッタールの逸話では、犬に対して優しさと愛情に溢れた眼差しが注がれており、すべての存在物との和を求める詩人の精神が垣間見られるように感じるのである。

「師ジュンディー[37]と犬の話」（2 章 6 話）では、ある男が師に「あなたと犬とどちらがましか？」という、当時としてはあるまじき問いを投げかける。いきり立つ弟子たちを押さえつつ、ジュンディー自身は「私は犬より優れてなどおらぬ」とさらりと答え、さらに次のように続ける。

もしありとあらゆる障害をものともせず信仰心を持ち続けて神秘主義道を歩むことができれば、犬よりはましと言えるのだが。しかし、困難に負けて信仰を守ることができなければ、犬ですらなく犬の毛一本にも劣るのだ。[38]

この言葉から、「たとえみなが犬を卑しいと見做そうとも、犬も人間も共に神の創造物であり、犬は人間となんら変わらない」という、当時としては斬新なアッタールの考えを読みとることができるのである。

2 章 8 話「老師アブー・サイードとスーフィーが犬をめぐって議論する話」では、あるスーフィーに痛めつけられた犬がアブー・サイードの許へ駆け寄り、公正な裁きを求める。スーフィーは、「この犬は私の服に触れたので、杖で打ち据えた」と言うが、それを聞いた犬は静まるどころか吠え続け、その場で足をばたつかせる。そこで老師は犬に次のように言うのである。

お前が喜ぶことはなんでも、私の命に賭けて償おう。最後の審判の日までもちこされることのないよう決定を下すがよい。もし私が奴に答えてほしいと望むなら、お前のため、私はここで奴を罰しよう。お前が怒るのを見たくはない。お前が喜ぶのを見たいのじゃ。[39]

アッタールは、犬に対してこれほどまでに優しく親切に接するアブー・サイードを描いている。犬は「スーフィーがその証である弊衣を身に着けていたので、善人だと思った。自分に危害を加えるなどとは夢にも思わなかった」と答える。そこで、アブー・サイードは速やかに、そのスーフィーから弊衣をはぎ取ることを命じる。

外見のみを取り繕う偽善者への批判をした詩人としては、後世のハーフェズ（Ḥāfiẓ-i Shīrāzī, Shams al-Dīn Muḥammad ibn Muḥammad, 1326?-90 頃）の名を挙げることができる。ハーフェズ

がスーフィーや導師、市中取締官、判事等、社会において尊敬の対象となっていた人々を手厳しく批判し否定的な眼差しで見つめたのには、アッタールの思想の影響も少なからずあったと考えられるが、詳細な研究は別の機会に譲ることとしたい。

「シブリー[40]への托鉢僧の質問」(12 章 11 話) では、托鉢僧がシブリーに「神の御座所へ向かう際、誰が最初にあなたを出迎えてくれたか」と質問する。シブリーは犬であると答え、次のようにつづける。

> 水のほとりに喉の渇きに耐えられずにいる犬を見た。犬は澄んだ水に映った自分の顔を見て、別の犬がそこにいるのだと思った。その犬を怖れて水を飲まずに、水の縁から逃げ出してしまった。が、喉の渇きを我慢しきれず、もう辛抱しきれなくなった時、突然自ら水に飛び込むと、もう 1 匹の犬は消えてしまった。自分の目の前から別の犬が消えた時、その 2 匹を隔てていた幕帳(とばり)はその犬自身だったのだ。これを見ていた私は、私自身が神と自分を隔てる幕帳(とばり)だということを確信することができた。自我が消滅したことが幸いした。よって、この犬が私の導師として、最初に出迎えてくれたのだ。[41]

2.9. 物

異教徒帯(ズンナール)と称される、ムスリムでない証の帯も、アッタールの手にかかるとイスラームの聖者に対して物申す存在として逸話を彩る。

「キリスト教徒の男と導師(シャイフ)バーヤズィードの物語」(7 章 3 話) では、導師(シャイフ)バーヤズィードが、1 人のキリスト教徒の腰にあった異教徒帯(ズンナール)に目を向ける。この物語では、異教徒帯(ズンナール)が直接導師(シャイフ)と話をするわけではないが、導師(シャイフ)自らが異教徒帯(ズンナール)から教訓を得る。ムスリムとなった元キリスト教徒が導師(シャイフ)の許へ行き、それまで腰にあった異教徒帯(ズンナール)を切り刻む。それを見た導師(シャイフ)が涙を流すのを見て、ある人が導師(シャイフ)に涙の理由を問う。導師(シャイフ)は、「70 年も経ってから腰の異教徒帯(ズンナール)を解き、瞬時に益が害に変わるなどどうしてあり得ようかと思ったら泣けてきたのだ。もしあの異教徒帯(ズンナール)が私の腰に締められていたなら、私はどうしたらよいのか、どう振舞えばよいのやら。そう思い、泣いているのだ」と答えたという。[42]

3. 庶民に対して

3.1. 女性

『神の書』に登場する女性たちは、政治権力者に対してであろうが、聖者に向かってであろうが、自身の意見を堂々と述べてきた。ここでは、一般庶民の男性と対峙した時の女性の言動に注目してみたい。アッタール自身男性であるにもかかわらず、教訓に満ちた多くの逸話の主

人公を女性とし、社会に受容される論理的な発言を彼女らに託している。

「メッカに巡礼する女と彼女を見つめていた男の話」（14 章 15 話）では、ある女がカアバ神殿の周りを回っていると、男が自分をじっと見つめているのに気づいたため、男に次のように言い放つ。

あんたが本物の信者なら、こんな時にどうして私にかまけていられるの？自分が哀れだって気づいてないようね。ここで誰においてきぼりにされたか、わからないのね。もし自分の男たる証を持ち合わせていたなら、ここで女のことを考える暇はなかったはず。あんたはここに何かを得るためにやってきたはずよ、何かを失うためではなく。あんたにはこれほど活気にあふれたバーザールがあるというのに、損を求めるというの？神の御前で恥というものを持ち合わせていないの？[43]

男にぎゃふんと言わせた女と、女にやり込められて口をあんぐり開けて為す術もない男の表情が目に浮かぶようである。

「ムスリムになったキリスト教徒の男の話」（5 章 5 話）では、キリスト教徒の男がムスリムになり、勝ち誇った気分になってその翌日酒を飲む。酔っ払った息子を見て嘆き悲しんだ母親がこう言う。

息子よ、何をしているのですか。イエスさまは早々に気分を害されお前に愛想をつかし、預言者ムハンマドさまはお前のことを喜んでなどおられませんよ。[44]

3.2. 子供

「母親と市場に行き迷子になった子供の話」（22 章 4 話）では、子供がバーザールで母親とはぐれてしまい、人々が母親の名や住所、地区を尋ねるが、子供は次のように言うばかりである。

僕は道に迷ったんだ。母さんも母さんの名前もわからない。住んでいる地区も家も知らない。母さんそのものしかわからないんだ。僕はひとりぼっちで困っているんだ。母さんにここにいてほしいということしか、僕にはわからない。僕の魂は血塗れだとわかっている。なぜなら、僕には母さんがいなきゃならないからだ。他のことなんて何もわからないよ。[45]

アッタールはこの子供と母親の逸話を通して、次のように人々に説いている。

自身を、この魂や肉体を、見てはならない。神の美しさを見るのだ、あなた自身ではなく。[46]

3.3. 放蕩者

「店から物を欲しがった放蕩者の話」（終章 12 話）では、ある放蕩者が店主と対峙する。意地悪な店主は放蕩者に「お前自身が傷つかない限り、何もお前にはやらんぞ。お前が自分の身体を傷つければ、私から現金を得られるぞ。さもなければこのままずっと立ちつくし、物乞いし続けることになる。」と言うが、放蕩者は間髪をいれず服を脱ぎ次のように言う。

俺の身体は傷だらけで、これからは魂が傷を受ける番なのさ。[47]

アッタールはこの逸話の直後の結論において、「この物乞いの放蕩者とは私自身」と述べている。

3.4. 鳥

『神の書』では、鳥が人を教え諭す逸話が 1 つだけ盛り込まれている。動物や鳥が主人公である他の物語では、対峙する相手も動物か鳥である。

「シャウビーがゴシキヒワ（小鳥の一種）を捕まえた男の話を語る」（13 章 14 話）では、男に捕らえられたゴシキヒワが、男に「もし私を放してくれるなら、あなたに 3 つの役立つ教訓を言いましょう。1 つ目はあなたの手の中で、でも 2 つ目は私が無事に枝の上に飛び移ってから。そして 3 つ目は山頂であなたに言いましょう」と言う。男が最初の教訓を求めると、ゴシキヒワは「あなたが失ったものは何でも、たとえそれが魂であろうとも、一瞬たりともそれを失ったことを悲しんではなりません」と言う。そこで男がゴシキヒワを解放し、ゴシキヒワは木の枝の上に飛び移り、そこで 2 つ目の教訓を男に語る。「もしありえないようなことを聞いたら、それを自分の目で見ないうちは信じてはいけません。」小鳥は山頂に移るとそこから男にこう言う。「私は自分の内に 2 つの大きな宝石を持っていて、各々20 ミスガール[48]の重さがありました。もし私を殺していたら、宝石はあなたの物となっていたのに。」男が悔しがって怒り、3 つ目の教訓を求めた際のゴシキヒワの答えが、次の通りである。

あなたにはひとかけらの分別もないのですか？前の 2 つの話をすっかり忘れてしまったようですね。2 つの話のうちの 1 つたりともまともに聞けなかったというのに、なぜ 3 つ目を聞きたがる必要があるのですか？あなたに「失った物を惜しむな、あり得ないようなことを

信じてはいけない」と言ったのですよ。清らかなお方！あなたは失った物をあまりに残念がり、私があり得ないことを言ったのにそれを信じたのですよ。私の肉は今 2 ミスガールもありません。どうすれば夜を明るく照らす 40 ミスガールもの 2 つの真珠が私の身体の内にあり得ましょうか？あなた、気は確かですか？[49]

小鳥は山頂から飛び立ち、男を悲しみと悔しさの中に置き去りにしたのだった。この物語はルーミーの『精神的マスナヴィー』にも収録されていることを付加しておこう。

4. 鳥や動物に対して

4.1. 蟻

イスラーム文化において、蟻はクルアーンの一章の名に付されており、スライマーン（ソロモン）と言葉を交わすことができるため、特別な価値を付与されている生物といえる。それでも蜂と比べれば、あまりにも小さくか弱い存在にすぎない。アッタールは「蜂と蟻の話」（13 章 15 話）において、すべてが思いのままで、人生を謳歌している者を蜂に、自身の今に不満を抱き嘆く者を蟻に喩える。突然肉屋の包丁が蜂に振りおろされ、蜂の人生は終わってしまう。アッタールは蟻に次のように語らせている。

好きな物をなんでも食べ、好きな場所に住んだ人はみな、あなたのように、結局は望みもしない目に遭わなければならないのです。自分の思い通りに生きている人があなたのように死ぬのです。さあ、結局あなたはどのように人生の終わりを迎えるのか、ご覧なさい。あなたは自分の限度を超えて足を踏み出したので、気づかずに足を血の中に踏み入れてしまったのですよ。[50]

4.2. 家禽

鷹は大空を雄飛するが、家禽は空を飛翔できないという点に注目すれば、鷹のほうが家禽より優れているといえる。しかし、アッタールは「鷹と家禽の話」（17 章 2 話）において、家禽のほうがより優れていることを我々に示す。ある日、鷹が家禽に「お前はいつでも人間の庇護の下にいる。それなのにどうして人間から逃げてばかりで誠実ではないのか？」と問う。すると家禽は「人間は私を殺すために私を大事に育てると私には知っているのだ。」と答え、こうつづける。

もしあなたがそれを誠実とみなすなら、不実のほうがまし。そんな愛情や誠実よりも、憎

しみのほうがずっとまし。[51]

5. 物に対して

5.1. 土塊

子供向け絵本の物語のような「石と土塊の話」(12 章 2 話) は、自然と心惹かれる物語である。石と土塊が旅の道連れとなり、海に辿り着く。石は「溺れて、難儀した話を海底で語ることになるな」と言うが、土塊はその存在が見えなくなり、消滅してしまう。誰も土塊が何処に行ったのかわからない。言葉にならない土塊の語る言葉が以下の通りである。

> 両世界に私の「自己」は残っていない。私の存在は針の先ほども残っていない。私の魂も肉体も見えない。すべて海である。海ははっきりと誰にでも見えるもの。[52]

5.2. 焼片(ほくち)

「火と焼片(ほくち)の話」(9 章 10 話) も心を惹きつけてやまない物語である。アッタールは何の燃えかすかも明言しない、そして通常何の価値も見出されることのない「焼片(ほくち)」に注目している。火と鉄がぶつかってできた焼片(ほくち)は、火に「お前は誰か」と問われる。焼片(ほくち)は「あなたの知り合い」と答える。しかし、火は「お前は黒ずんでいるが、私は明るさを振りまく存在。あなたのような真っ黒な者と私はどういう関係があるというのか?」と言う。それに対する焼片(ほくち)の答えが以下の通りである。

> 私が真っ黒なのは火以外の誰のせいだというのでしょう?あなたがあかあかと私を燃やしたのですよ。なのに今になって知らぬ、存ぜぬと言うのですか。これほどむごたらしく私はあなたに焼かれたのですから、今その焼いたものを優しく守ってくださいまし。[53]

火は焼片(ほくち)の言葉に偽りはないと知り、世の多くの物の中から選りすぐって焼片(ほくち)を抱きしめたのだった。

おわりに

アッタールは『神の書』の数々の逸話において、自身の生きた実社会に反し、階層の低い者が上層の者へ、弱い動物が強い動物へ、価値なき物が価値ある物へ、含蓄ある言葉を投げかけるように言葉を紡いだ。そして、自らの教育哲学の大部分を対話や問答という枠に収めて提示し、その議論や言葉から神智学的結論を導きだそうとした。

社会的弱者を主人公にしたこれらの逸話をつぶさに読み込んだ結果、アッタールは同時代の多くの神秘主義修行者同様、1 人の人物を「完全人間」として逸話に登場させてはいるものの、「社会的弱者」に対する彼特有の洞察力によって彼らを特別な魅力を伴う主人公として提示し、社会の中で忘れかけられた集団を炙り出し、彼らに対する自身の肯定的な視線を世に示すことに成功していることが明らかになった。アッタールが社会における公平、公正さを心底願っていたことは明白である。これは世界中で今なお望まれ続けている理想でもある。800 年もの遠い昔に、遥か遠い中東イランの地で、1 人のペルシア神秘主義詩人が、このような高邁な理想を抱いていたことに驚かされる人は少なくないのではないだろうか。さらに愚見を述べるならば、現代に生きる我々には、個人の倫理観に基づき社会的行動を起こす際、人間共通の理想を実現できるはずの条件が担保されているにもかかわらず、いまだ目を見張るほどの進歩を見ていないということは、さらに驚愕すべき、いや、呆れ果てるほどのゆゆしき事態であることをはっきりと自覚しなければならない、と筆者は密かに思うのである。

註

1) 本論文は、2018 年 4 月にイランで開催された第 1 回国際ペルシア語・イラン＝イスラーム思想学会（アッタール）（Nakhostīn hamāyesh-e beyn-ol-melallī-ye zabān-e fārsī va andīshe-ye Īranī-Eslāmī (Farīd al-Dīn 'Aṭṭār-i Nīshābūrī)）に筆者が提出したペルシア語論文"Mokhāṭab-shenāsī-ye ḥekāyat-hā-ye *Ilāhī-nāmah*"から抜粋し、和訳、加筆修正したものである。
2) 女男(mukhannath)とは、男でありながら女の風体を公にする者のこと。
3) アッタール作品の分析研究は数多あるが、中でも注目に値する論考を以下数点挙げておく。
・ Pūrnāmdāriyān, Taqī 1394/2015, "'Aṭṭār va 'aqāyed-e Gnosī", *Majmū'e-ye maqālāt-e hamāyesh-e beyn-ol-melallī-ye barrasī-ye manẓūme-ye fekrī va Āthār-e 'Aṭṭār*, Dāneshgāh-e Eṣfahān, Qoṭb-e 'elmī-ye taḥqīq dar motūn-e ḥekamī va 'erfānī.
・ Ḥoseynī, Maryam 1390/2011, "Naqd-e kohan-olgūyī-ye *Ilāhī-nāmah*-yi 'Aṭṭār", *Faṣl-nāme-ye 'elmī-pazhūheshī-ye Kāvosh-nāme*, Sāl-e davāzdahom, Shomāre-ye 23.
・ 'Alī-qolīzādeh,Ḥoseyn 1390/2011, "Barrasī va taḥlīl-e shīve-hā-ye bayān va estedlāl dar zabān-e dīvānegān-e 'Aṭṭār", *Majalle-ye 'elmī-pazhūhī-ye tafsīr va taḥlīl-e motūn-e zabān va adab-e fārsī*, Shomāre-ye 10.
・ Gholāmpūr, Leylā & Ṭāvūsī, Moḥammad & Owjāq-'alīzāde, Shahīn, 1394/2015, "Bāz-khānī-ye asāṭīrī - 'elmī-ye naẓarīye-ye ẕarre dar ash'ār-e 'erfānī-ye 'Aṭṭār", *Faṣl-nāme-ye 'elmī-pazhūhī-ye adabiyāt-e 'erfānī*, Shomāre-ye 13.
・ 杉田英明、1995 年,「中東文学における狂の系譜」『文學界』第 49 巻 5 号，特集：狂の精神史， 170–185 頁。
4) 同じ神秘主義説話文学の範疇では、ルーミーの『精神的マスナヴィー』第 1 巻に収録されている「預言者ムハンマドと杖ハンナーナ」の物語がその代表といえる。
5) アッタールの描出した女性像については、佐々木あや乃 2016 を参照。
6) ギャズは長さの単位で約 1 メートル。したがって、2 ギャズは 2 メートル弱。
7) 'Aṭṭār, Farīd al-Dīn Muḥammad, and Shafi'ī-Kadkanī(ed.) 1387/2008, 308.
8) *Ibid.*, 313.
9) *Ibid.*, 309.
10) *Ibid.*, 304.

11) *Ibid.*, loc. cit.
12) *Ibid.*, loc. cit.
13) *Ibid.*, 346.
14) *Ibid.*, 225.
15) *Ibid.*, 154.
16) *Ibid.*, 346.
17) バーヤズィード・バスターミーは 9 世紀の高名な初期の神秘家。
18) *Ibid.*, 346.
19) *Ibid.*, loc. cit.
20) *Ibid.*, 361.
21) *Ibid.*, 204.
22) イラン南西部に位置するケルマーンは、なつめやしの名産地である。
23) *Ibid.*, 205.
24) *Ibid.*, 410-411.
25) アリーはシーア派初代イマーム、スンニー派第 4 代正統カリフ。シーア派ではアリーとアリーの子孫のみがイスラーム共同体の指導者たるイマームとなることができるとされている。
26) *Ibid.*, 147.
27) *Ibid.*, loc. cit.
28) *Ibid.*, 147.
29) *Ibid.*, 242-243.
30) *Ibid.*, 252.
31) *Ibid.*, 298.
32) *Ibid.*, 148.
33) *Ibid.*, loc. cit.
34) *Ibid.*, 149.
35) *Ibid.*, 155.
36) *Ibid.*, 156.
37) リッターによれば、この「師ジュンディー」とは、おそらくバーバー・カマール・ジュンディーを指す。著名なスーフィー、ナジュムッディーン・クブラー(1220 年没、ルーミーの師たるシャムス・タブリーズの師）の弟子。
38) *Ibid.*, 151.
39) *Ibid.*, 152.
40) シブリーは 9～10 世紀の神秘家で、古典期スーフィズムを代表する 1 人。シャタハートと呼ばれる酔言を多く残したことで知られる。
41) *Ibid.*, 266-267.
42) *Ibid.*, 200.
43) *Ibid.*, 296.
44) *Ibid.*, 183.
45) *Ibid.*, 390-391.
46) *Ibid.*, 391.
47) *Ibid.*, 409.
48) 1 ミスガールは約 5 グラム。よって 20 ミスガールは約 100 グラム。
49) *Ibid.*, 278-279.
50) *Ibid.*, 279.
51) *Ibid.*, 325.
52) *Ibid.*, 259.
53) *Ibid.*, 229.

参考文献

（著作）

- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn Muḥammad, and Shafi‘ī-Kadkanī, Moḥammad-Reżā(taṣḥīḥ, sharḥ va ta‘līq) 1387/2008, *Ilāhī-nāmah*, Tehrān. Sokhan.
- Pūrnāmdāriyān, Taqī 1390/2011, *Dīdār bā sīmorgh*, Tehrān, Pazhūheshgāh-e ‘olūm-e ensānī va moṭāle‘āt-e farhangī.
- Ritter, Hellmut, and O’Kane, John(translated) 2013, *The Ocean of the Soul Men, the World and God in the Stories of Farīd al-Dīn ‘Aṭṭār*, Brill, Leiden-Boston.
- Shafi‘ī-Kadkanī, Moḥammad-Reżā 1378/2008, *Zabūr-e pārsī (negāhī be zendegī va ghazal-hā-ye ‘Aṭṭār)*, Tehrān. Āgāh.

（論文）

- Shakībī-momtāz, Nasrīn 1389/2010, “Dāstān-e do sag (moqāyese-ye dāstān-e <sag-e velgard-e Ṣādeq-e Ḥedāyat> va <sag-e bī-arbāb-e sūdarbarī>, *Majalle-ye bārān*, Shomāre-ye 26 va 27.
- 佐々木あや乃、2016 年、「ペルシア神秘主義説話文学の女性像～アッタールの『神の書』～より」『総合文化研究』19 号、6-16 頁。